

じんげんとろ

むかし、矢田が原に、じんで、という人が住んでいました。家の前を流れる水内川が大水のたび、瀬になったり、瀬になっていました。しかし、じんでの家の前は、いつも瀬になっているので

「じんでのとろ」

と呼んでいました。それがいつの間にか

「じんげんとろ」

といわれるようになりました。

ある年、大水の後“じんげんとろ”に、何かピカピカ水のそこに光るものがあります。

「金か銀かが沈んでおり、それが水にピカピカ光るのだろう」

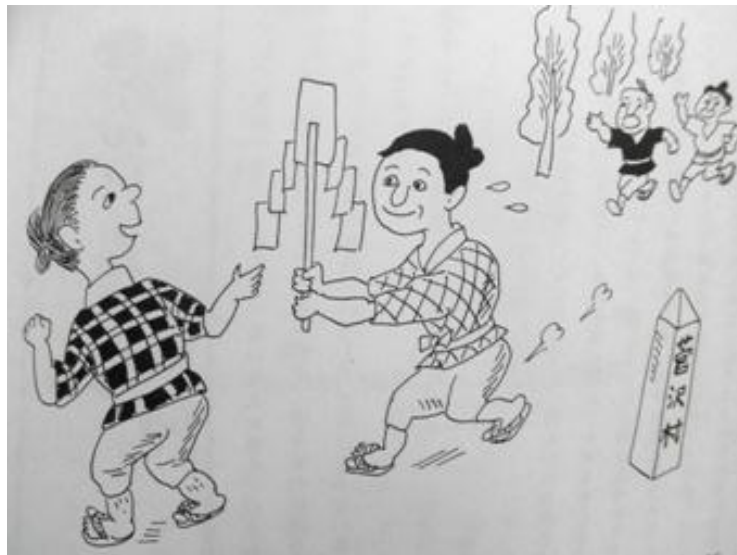
と人々は水の中にもぐって探しましたが何も見つかりません。そんなことがあり、みんなで不思議がっていると、考え深い次郎兵衛という人が

「これは神業かもしれん」

と諸口（障子紙）で袴とはかまを作り、それを着て静かに、“じんげんとろ”のピカピカ光っているところに入りました。水の中に沈み、やがて上がってきました。なんと、袴とはかまに、金色に輝くものがくっついて上がりました。

「これは、神様の乗り移りに違いない」

と紙で作った袴とはかまで、御幣を作って麦谷の八幡神社に祀りました。



麦谷の八幡神社はその頃、五か村の氏神でした。お祭りの日、五か村のうち多田村や菅沢村の村人が来るのが遅いときが多かったので、お祭りのお神酒は、その人達が来た時には無いことがたびたびありました。

「飲んだが悪い」

「遅いのが悪い」

と喧嘩になることがありました。

こんなことがあるたびに、多田村と菅沢村の連中は

「地の利が悪いわしらの村に、御神体の御幣を頂こうではないか」

と話がまとまりました。そこで、ある年のお祭りの日、御幣を奪った両村の人は、あらかじめ計画していたとおり、追ってくる人たちをよそに、リレー式で上水内に持ち帰ったということです。